



Title	新潟大学の融合研究推進（U-goプログラム等）で取り組む人社系分野が先導し分野融合システムで実施する研究でのURAの役割について
Author(s)	久間木, 寧子
Relation	RA協議会第6回年次大会F-1セッション / 第8回JINSHA 情報共有会 報告書 : 異分野融合研究・プロジェクトにおけるURAの役割について考える
Issue Date	2022-04-22
DOI	https://doi.org/10.14943/RA6_F1.27
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/87099
Type	conference paper
File Information	4_RA6_F1_2_Kumaki.pdf



新潟大学の融合研究推進（U-go プログラム等）で取り組む人社系分野が先導し分野融合システムで実施する研究での URA の役割について

新潟大学 研究企画室・主任 URA 久間木 寧子

新潟大学研究企画室 URA の久間木です。本日は発表の機会をいただき、ありがとうございます。「新潟大学の融合研究推進で取り組む人社系分野が先導し分野融合システムで実施する研究での URA の役割について」として、実際、URA が中にちょっと入らせていただいている融合研究の実例紹介をさせていただきます。

まず、本学の状況を説明いたしますと、組織は3研究科10学部あり、キャンパスは主に3箇所、うち市内の2キャンパス間は10キロ程度ですが思ったよりも遠い距離となっており、学内の学際的な研究が進まない一つの要因ともなっています。附属施設は病院・2研究所、日本酒学などの特色あるセンターがあります。研究者数1,100名で教員自体は医歯学系が大体半分、さらにその半分が自然科学系と人文科学系となります。新潟大学の URA は7名で動いており、各担当がありつつも外部資金獲得支援は全員が担当する体制です。

人文・社会科学系に特化した研究支援は実施していません（2021年4月から開始）が、人文・社会科学系対応としては、例えば、部局別で実施する科研費説明会、個別の研究者支援などは行っています。研究 IR 担当として、学部内の科研費等の研究状況分析や論文の分析などを行い、それら情報を元に各部局の研究担当副学部長とのミーティングを年2回実施しています。この機会に人社系研究ではどういったことを重視しているのかなど詳しくお聞きしています。

その他の取り組みとして、新潟大学発の異分野融合研究を萌芽段階から発展ステージまで応援する U-go プログラム、URA が三つの取り組みを一体的に

推進して、新たな学問分野の創出と外部資金獲得の支援をします。その内容は、研究者が一堂に会して直接交流できる場の設置（U-go サロン）、学問分野の境界を超えた連携・融合をするための研究を推進するための学内グラント（U-go グラント）、異分野連携などの研究者紹介をするマッチング支援（U-go デスク）になります。

今回の事例紹介に関連する U-go グラントの内容を少し紹介しますと、6月に公募、9月から研究開始、約半年間最大 100 万円の研究費を配分します。学問分野の領域を超えた連携を支援しているため、二つ以上の学問分野での参加が必要です。本学教員は 2 名以上、他機関研究者も参加可能です。URA は審査委員としても関わっています。

これまでの 5 年間の申請課題は 126 件、うちチーム代表者が人社系研究者の課題は 12 件、分担者に人社系研究者が入る課題は 27 件でした。本学研究者の大体 2 割程度が人社系研究者となるので、人社系研究中心の応募がまだ少ない状況と言えます（人社系の分類は、大学の学部・学系等の分類に従っています）。

ではここからは人社系研究支援の具体的に取り組み内容を紹介いたします。

環境哲学・合意形成について現場での活動を研究されている研究者から、自分の研究内容に興味がありそうな研究者がいたら紹介して欲しいとの相談が発端となりました。その後、開催した U-go サロン（異分野融合研究に興味のある研究者が参加）で発表された民俗学・文化人類学の研究者の研究内に、地域課題への取り組み方に共通点があるのではと考え、URA から両者の紹介を行ったところ、各々が取り組む課題の中で特に「河川領域における地域課題」に共通課題があり、また研究内容の他にこれからの研究進捗には「地域課題に興味や課題を感じている自然科学系研究者の参画が必要」という課題が見え、課題解決に向けた新しい研究チームを立ち上げることとなりました。そこで実河川での河川の測定やその制御について研究されている工学系の研究者を紹介したところ、「実河川領域の研究を展開する上で、その地域住民を含めた課題も合わせて検討する必要性を感じており、人社系研究者と共同研究をしたいと考えていた」ということがわかり、最終的には人社系 3 名、自然科学系 2 名の

(新しい領域を立ち上げるというよりも) それぞれが元々持っていた課題でつながり、その課題を社会学・生態学・水理学という異なった分野からアプローチするような融合研究チームになり、その内容は U-go グラント採択課題としての活動につながりました。スライド 6 ページにメンバーの詳細があります。研究チームに参加した研究者からは、同じ課題に対して多角的な視野を得る良い機会になった、学生の学術分野での人材育成の方向性が見えた、など色々な効果への感想もありました。異分野融合チーム形成におけるコツを伺ったところ、文系・理系などはあまり関係なく、研究者の積極性や明確なビジョンがあったことで今回の研究チームがうまくいったのではないかと、こういったやる気のある方々の間を URA が積極的に取り持って欲しいという意見をいただきました。

もう一つの人社系研究が主となる異分野融合研究の事例紹介は『科学技術イノベーションによる地域社会課題解決 (DESIGN-i)』と申請についてです。この事業は、統括プランナーのもと、様々なステークホルダーをつないだ対話の場で地域から課題を抽出して、科学技術イノベーションで解決していく取り組みです。学内研究者から候補を検討した折、科学技術イノベーションでの課題解決にはなるが、それよりも地域活動の実績がある社会科学系の研究者のほうが統括には良いのではないかと考え、地域住民間の合意形成を行っている研究者が統括となり、提案課題が採択となりました。ここでの URA の役割として、なぜ自然科学系ではなく人社系研究者が中心になると良いのか、という構想の理解を申請に関わる方々に説明することがありました。採択後は、地域課題の抽出後に、その地域課題解決をどのような科学技術へ展開するか考える必要がありますが、その部分は人社系研究者としては弱い部分になってしまうので、どのような研究者、研究分野や科学技術とコラボできるのかを、統括の考えを反映しながら研究チーム形成を検討できるように、URA も併走する形で参加しています。本発表に際して、自然科学系研究者と組む研究チームの課題を統括の研究者に伺ったところ、自然科学系分野では、活動に対して明確な成果(研究業績)を出さなくてはならないと考えるようで、クリエイティブな解を生み出そうとしても、最終的には合理性や学術的な側面を重視するように

なってしまう、面白くなくなってしまうことが課題と感じているそうです。人社系研究の研究業績については、分野外の方などには非常にわかりづらく、自分の活動をどう見せるのかは常々課題であるとも考えているとも言われていました。URA への要望は、研究者自身をよく見ながら、色々な研究者を紹介してくれるコンシェルジュ的に併走してくれるとありがたいという意見がありました。

人社系研究が中心となる融合研究チーム形成に関わらせていただいた感想としては、分野に関係なくチーム内で共通する研究キーワードが設定できること、人社系は、異分野融合研究の中では、自然科学系が不得意とする社会への窓口の役割を担っている分野であることがよく分かりました。また人社系の中にも、基礎系・応用系があると思うようになりました。人社系研究の活発化には、人社系研究の活動を分かりやすく紹介することや評価指標が、課題になってくるのではないかと考えています。



RA協議会 第6回年次大会 F-1セッション

異分野融合研究・プロジェクトにおける URAの役割について考える

新潟大学の融合研究推進（U-goプログラム等）で取り組む
人社系分野が先導し分野融合システムで実施する研究での
URAの役割について

新潟大学 研究企画室 主任URA 久間木寧子

2020年9月18日



自己紹介・新潟大学URAメンバー紹介



URA 阿部 知子

- ・7年間脳科学研究の研究支援に従事
- ・新大での産学官連携を経てURAに

外部資金獲得支援



主任URA 飯島 想

- ・生物的環境浄化に関する研究で博士号取得
- ・JICA専門家としてベトナム駐在等

国際共同研究支援



主任URA 久間木 寧子

- ・微生物の酵素研究で博士号取得
- ・NITEでのポストドクを経て本職へ

研究IR



URA 武井 教展

- ・認知症の遺伝的関連解析の研究で博士号取得
- ・病者向け特殊食品の企業研究員を経て本職に

外部資金獲得支援



主任URA 長谷川 佐知子

- ・住友商事で10年間化学品貿易業務に従事
- ・英国留学、新大での産学官連携を経てURAに

研究推進企画



主任URA 平井 克之

- ・植物ウイルスの発病機構で博士号取得
- ・日本郵便総務総合職として、人事やコンプライアンス等の企画部門に従事

研究IR



URA 李 香丹

- ・国家環境協力の研究で博士号取得
- ・県内学校での教員経験等を経てURAに

外部資金獲得支援

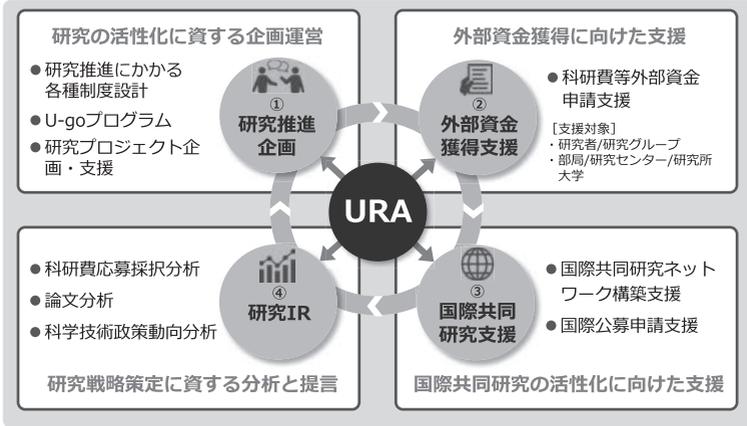


URAアシスタント 中村 まゆみ

2020年9月現在

新潟大学 URAの業務内容：「4つの柱」 研究支援メインから活動を展開

平成24年（2012年）に【文部科学省「リサーチ・アドミニストレーターを育成・確保するシステムの整備」事業】採択からURA組織整備開始



これまでに関わってきた人社系研究・具体的事例

➡「人文社会科学系で」と、特化した研究支援などは実施していない。

- **科研費支援**：種目別懇談会、部局別科研費説明会、個別支援
- **事業申請**：【文科省】DESIGN-i (科学技術イノベーションによる地域社会課題解決)
- **部局訪問**：学部内の研究状況について、研究担当副学部長等とミーティング（年2回）
- **U-goプログラム**：異分野融合研究を萌芽の段階から発展まで応援

↑
**学内ファンドで取り組まれる融合プロジェクトのうち、
 人社系研究が参画するものに注目**

U-goプログラム（異分野融合研究支援）

URAが3つの取組を一体的に推進し、新たな学問領域の創出、外部資金獲得を支援
新潟大学発の異分野連携・融合研究支援プログラム

URAは何を？

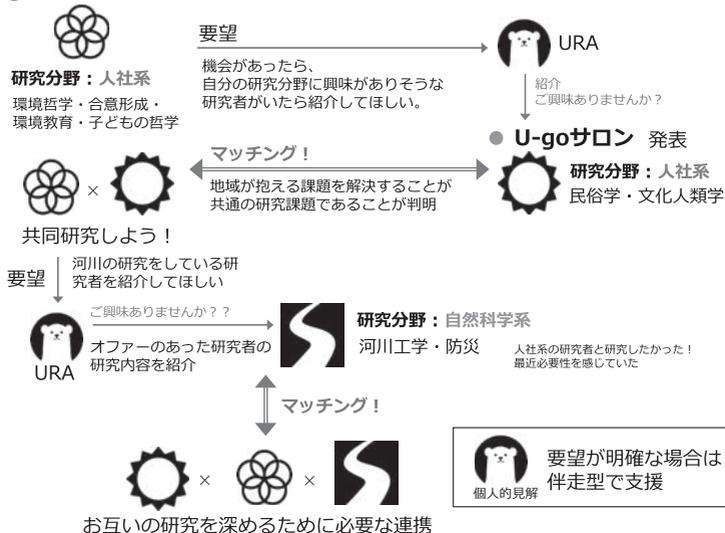
- | | | |
|--|--|--|
| <p>● U-goサロン
半年に1回開催
6月 / 12月</p> | <p>研究者が一堂に会して
直接交流できる場</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・研究者と懇談 ・ご紹介 |
| <p>● U-goグラント
6~7月公募</p> | <p>学問分野の境界を超えた
連携・融合による研究を
推進するための学内グラント</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・マッチング支援（U-goデスク） ・審査 |
| <p>● U-goデスク
常時受付</p> | <p>異分野連携・
融合研究を実施したい
研究者間をつなぐ</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・研究などの話をじっくり聞く ・希望に沿う研究者を紹介 ・初会合の立会い |



個人的見解

対象が限定されていない不特定多数の
研究者の研究内容や今後の展望などを、じっくり聞く機会がある。

U-goプログラム（異分野融合研究支援）を活用した人社会主導の研究チーム形成



U-goプログラム（異分野融合研究支援）を活用した人社系主導の研究チーム形成

● U-go Grant

社会・生態・水理の融合システムとしての河川環境の統合的評価に関する研究
～新潟県村上市三面川を事例に～

	所属・役職	役割
研究代表者	佐渡自然共生科学センター・准教授	全体の統括、河川環境の統合的評価ツールのデザイン
研究分担者	人文学部・准教授	河川の地名にもとづく流域の民俗学的調査
研究分担者	災害・復興科学研究所・准教授	河川環境の定量評価と復元技術の検討
研究分担者	佐渡自然共生科学センター・准教授	河川の地名にもとづく生き物の生息環境の分析
研究分担者	人文学部・准教授	地理学的視点からのツールの評価

研究成果を共著書で出版（文系分野）

人社系主導の研究チーム形成・【文科省事業】

科学技術イノベーションによる地域社会課題解決（DESIGN-I）

「地域のポテンシャルを最大限引き出すための未来社会ビジョン」を設定するとともに、当該ビジョン達成に向けて、「持続可能な開発目標（SDGs）」の達成にも繋がる、解決すべき地域が抱える多種多様な社会課題を技術課題へと転換させ、将来的に地域内外の大学や研究機関が持つ研究シーズを取り込みつつ、小規模試行実験・社会実装の取組へ繋げることを想定し、科学技術イノベーション（=STI）を活用した解決策を構築する事業

様々なステークホルダーをつないだ対話の場で
地域からの課題を抽出し、その課題を科学技術イノベーションで解決していく

統括プランナーが重要

地域とともに活動している研究者

社会科学系の研究者ではないか？

人社系主導の研究チーム形成・【文科省事業】

【文科省事業】 科学技術イノベーションによる
地域社会課題解決 (DESIGN-I)

研究内容が合致しそう。興味ありませんか？

できそうです！



研究分野：人社系

環境哲学・合意形成・
環境教育・子どもの哲学

■ 研究者からの要望

- ✓ 科学技術への展開がわからない・どう考えれば良いのか
- ✓ どういった研究を加えると良いと思うか
- ✓ 新規参画者はどう考えると良いか
- ✓ 面白い取組があるので、参加しませんか

■ URAの活動

- ✓ 事業の内容を理解し、説明
- ✓ 学内外に「なぜこの研究者が統括である必要性」を説明
- ✓ 申請書・報告書等、資料作成
- ✓ 事業が円滑に進むよう、適宜部局内の調整
- ✓ 研究の進捗状況を把握 → 現地訪問・取組に参加
- ✓ 新たな参画者（特に自然科学系）を紹介
- ✓ 次の展開を常時相談



研究者本人も含めて
説明することが仕事



個人的見解

《 人文系研究に関わり感じていること 》

- ✓ 融合研究は「キーワード」で繋がるので、人社系代表となって自然科学系や医歯学系とも研究もできる。→ 他分野と同様に人社系の特徴（分野の特色）への考慮はもちろん必要
- ✓ 自然科学系・医歯学系と同様、「基礎」「応用」2つの側面がある
- ✓ 自然科学系・医歯学系よりも、生活・現場に密接な学問領域であり、異分野の中の社会貢献の窓口。
- ✓ （どの分野も同じだが）研究の展開力は研究者に依存

➡ 社会にとっては最も身近な学問領域で、汎用性が一番高いのではないか

《 人社系研究への注目度を上げるには 》

- ✓ 評価（学問の成果の見える化）の工夫
- ✓ 他分野との融合研究のきっかけ作り：融合で、より生かされる分野？

